ロマン派の作曲家たち

18 世紀のヨーロッパを支配していた啓蒙主義は、理性を偏重し過ぎ、伝統を軽視する傾向があったため、19 世紀になると、それに対する反動としてロマン主義が生まれてきました。冷徹な理性よりも、人間に本来自然に備わっている感情を重視し、それを空想的、夢幻的、牧歌的な世界への憧れという形で表現したのがロマン主義です。ロマン主義はまた、なによりもまず個人の人間性を尊重する芸術でもありました。

ロマン派の作曲家たちは、19 世紀の激動の時代を背景に活動していました。この時代は、産業革命や政治的変動、ナショナリズムの台頭、個人主義の拡大など、社会の大きな変革が進んでいた時期です。そのため、ロマン派の作曲家たちの音楽には、こうした時代の影響が色濃く反映されています。彼らの作品には、個人の感情や自然、愛、死、超自然的なもの、そしてナショナリズムなどがテーマとして頻繁に登場します。

産業革命と技術の進展

19 世紀は産業革命が進行し、社会の急速な工業化が進んだ時期です。これにより都市化が進み、多くの人々が都市に移住する一方で、田園的な生活に対する郷愁も音楽のテーマとして登場するようになりました。楽器の技術革新も進み、ピアノやオーケストラの楽器の性能が向上し、音楽の表現力が飛躍的に 向上しました。

個人主義と感情の重視

啓蒙主義やフランス革命の影響を受け、ロマン派では個人の感情や主観的な体験が重要視されました。音楽においても、作曲家たちは感情の表現を重視し、従来の形式にとらわれない自由な発想で作曲を行うようになります。ベートーヴェンはこの個人主義の象徴的な存在であり、彼の作品はロマン派の作曲家たちに大きな影響を与えました。

ナショナリズムと民族主義

19 世紀後半には、特にヨーロッパの各国でナショナリズムが台頭しました。この流れの中で、多くの作曲家が自国の伝統的な音楽や民族舞曲を取り入れ、民族的なアイデンティティを音楽に反映させました。たとえば、フレデリック・ショパンのマズルカやポロネーズ、ベドルジハ・スメタナの交響詩《わが祖国》などはその代表例です。

人間関係と作曲家のネットワーク

ロマン派の作曲家たちは、互いに深い影響を与え合うとともに、文学者や哲学者、画家など、他の芸術分野のクリエイターとも密接に関わっていました。また、パトロンや社交界の人々との関係も彼らのキャリアに大きな影響を与えました。

フレデリック・ショパンとフランツ・リスト

ショパンとリストは同時代のロマン派の巨匠として知られていますが、二人は異なる音楽スタイルを持ちながらも、互いに尊敬し合っていました。ショパンは主にピアノ独奏曲を中心に内面的な表現を追求したのに対し、リストは壮大なヴィルトゥオーソ演奏とオーケストラ作品を好みました。

ロベルト・シューマンとクララ・シューマン

ロベルト・シューマンは、作曲家であり音楽評論家でもありました。彼は若いブラームスの才能を早くから認め、彼を擁護しました。また、シューマンの妻クララ・シューマンは、当時最高のピアニストの一人であり、作曲家としても成功しました。彼女はロマン派のピアノ音楽の普及にも大きな役割を果たしました。

シューベルトとシューマン

フランツ・シューベルトは、ロマン派初期の重要な作曲家であり、彼の歌曲は後の作曲家たちに大きな影響を与えました。ロベルト・シューマンは、シューベルトの音楽を深く評価し、彼の作品を広める役割を果たしました。また、シューマン自身も優れたピアニストであり、妻クララ・シューマンの影響も大きかったです。クララもまた作曲家であり、演奏家としてロマン派音楽の普及に大きく貢献しました。

リストとワーグナー

フランツ・リストは、リヒャルト・ワーグナーと深い友情を持ち、ワーグナーの音楽ドラマの発展に貢献しました。ワーグナーはリストの娘、コジマと結婚し、リストとワーグナーは互いの作品に強い影響を与え合いました。リストのピアノ音楽は、ワーグナーのオペラの影響を受け、壮大で感情的な要素を持っています。

ブラームスとワーグナーの対立:

ブラームス「絶対音楽」とワーグナー「標題音楽」は、ロマン派の音楽の２つの異なる潮流を代表しました。ワーグナーがオペラや劇的な音楽を重視し、革新的な和声と

形式を追求したのに対し、ブラームスはより伝統的な形式と純粋な音楽の美を追求しました。彼らのスタイルの違いは、19 世紀後半の音楽界で大きな対立を引き起こしました。

ブラームスとアントニン・ドヴォルザーク

良好な関係を築いていて、ブラームスはドヴォルザークの才能を高く評価し、彼のメロディの美しさを称賛していました。

ヨハネス・ブラームスとロベルト・シューマン、クララ・シューマン

ブラームスはシューマン夫妻と非常に親しい関係にありました。シューマンは彼を「未来の音楽の救世主」として絶賛しました。また、シューマンが精神的な問題を抱えるようになった後も、ブラームスはクララと深い友情を維持し、彼女の演奏活動を支えました。

ピョートル・チャイコフスキーとナショナリズム

ロシアの作曲家チャイコフスキーは、ロシア・ナショナリズムの影響を受けつつも、より普遍的な西洋の音楽形式を重視しました。彼は「五人組」と呼ばれるロシアの民族主義的作曲家グループ(ムソルグスキー、リムスキーニコルサコフなど)とは距離を置き、より国際的なスタイルを追求しました。

3. 作曲家たちの思想と影響

ベートーヴェンの影響

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、ロマン派の作曲家にとって非常に大きな影響を与えました。彼の音楽は古典派の形式を継承しながらも、個人的な感情表現や自由な形式を追求するものでした。特に彼の後期作品は、ロマン派の作曲家たちにとって一つの模範となりました。

文学と音楽

多くのロマン派の作曲家は、文学から大きな影響を受けました。シューマンやリストは、文学や詩を音楽に取り入れ、標題音楽を作曲しました。また、リヒャルト・ワーグ

ナーは、音楽とドラマを融合させた「総合芸術」を提唱し、オペラを新たな境地へと導きました。

宗教と神秘主義

一部のロマン派作曲家たちは宗教的、哲学的なテーマにも関心を持っていました。フランツ・リストは晩年に宗教音楽に強い興味を示し、多くの宗教的な作品を残しました。また、アレクサンドル・スクリャービンは、神秘主義やスピリチュアリズムに傾倒し、彼の音楽は次第に抽象的で哲学的なものとなっていきました。

ロマン派の作曲家たちは、19 世紀の社会変革の中で、個人主義や感情表現、民族的アイデンティティを音楽に反映させました。彼らは互いに影響を与え合い、他の芸術分野や思想とも密接に関わりながら、豊かな音楽文化を築き上げました。これにより、ロマン派音楽は感情豊かで多様な表現を持つ芸術の黄金時代を迎えることができました。

特にドイツにおいてその傾向は著しく、1770 年代の〈シュトルム・ウント・ドランク〉(疾風怒濤)とよばれる文学運動に始まったその運動は、ゲーテ(J. W. von Goethe, 1749-1832)やシラー(J.F. von Schiller, 1759-1805)などによって推し進められていきます。

19 世紀に入ると、さらに、シュレーゲル兄弟(兄アウグスト August W. Schlegel, 1767-1845。弟フリードリヒ Friedlich, 1772-1829)、ノヴァーリス(Novalis, 1772-1801)、ハイネ(H. Heine, 1797-1856)、グリム兄弟(兄ヤコプ Jacob. Grimm, 1785-1863。弟ヴィルヘルム Wilhelm, 1786-1859)などの作家や詩人などが輩出し、ロマン主義文学の花が開いていったのです。

同じ頃、フランスではシャトーブリアン(F. G. Chateaubriand, 1768- 1848)をはじめ、ユーゴ(V. Hugo, 1802-85)、ラマルティーヌ(Lamartine, 1790-1869)、ミュッセ(A. de Musset, 1810-57)などのロマン派の詩人、ショパンとの恋愛で知られるジョルジュ・サンド(George Sand, 1804-76)などの作家が登場し、ロマン主義から写実主義的傾向が高まってきます。

イギリスには、ワーズワース(W. Wordsworth, 1770-1821)、バイロン(L. Byron, 1788-1824)、シェリー(P. B. Shelley, 1792-1822)、キーツ(J. keats, 1795-1821)、テニソン(A. Tennyson, 1809-92)、ブラウニング(R. Browning, 1812-89)などの詩人が輩出し、デンマークには童話作家として有名なアンデルセン(H. C. Andersen, 1805-75)が現れま

す。
さらに19世紀の中頃になると、フランスにはゴンクール兄弟(兄エドモン Edmond de Goncourt, 1822-96。弟ジュール Jules de, 1830-70)やゾラ(E. Zola, 1840-1902)などが出て、自然主義の運動を展開し、《女の一生》で有名なモーパッサン(G. de Maupassant, 1850-93)も同じ時期に活動を始めます。自然主義の運動はイギリスにも見られ、ディケンズ(C. Dickens, 1812-70)やハーディ(T. Hardy, 1840-1928)などが活躍。ドイツではハウプトマン(G. Hauptmann, 1862-1946)が劇作面での仕事を遺しています。

ロシアでは詩人のプーシキン(A. F. Pushikin, 1799-1837)やゴーゴリ(N. Gogol, 1809-52)をはじめ、ツルゲーネフ(I.S. Turgenev, 1818-83)、トルストイ(C. L. N. Tolstoy, 1828-1910)、ドストエフスキー(F. Dostoevsky, 1821-81)、チェーホフ(A. P. Tchehov, 1860-1904)といった、私たちが日頃親しんでいる文豪が次々と輩出されています。
《人形の家》で知られるノルウェーのイプセン(H. Ibsen, 1828-1906)や、スウェーデンのストリンドベリ(A. Strindberg, 1849-1912)なども忘れることができません。
そうした文学面における多彩な活動と並行するように、美術の世界でも多くの重要な画家たちが登場します。強烈な色彩感で知られるドラクロア(F. V. E. Delacroix, 1798-1863)をはじめとして、コロー(J. B. C. Corot, 1796-1875)、ミレー(J. F. Millet, 1814-75)、ドーミエ(H. V. Daumier, 1808-79)などが現れて、写実主義、現実主義、自然主義といったそれぞれの特色を示しながら、ロマン主義絵画の世界を築き上げ、19世紀末の印象主義へと結びついていったのです。

一方、思想界も18世紀末から19世紀初めにかけて、ドイツにカント(I. Kant, 1724-1804)が出て、その批判哲学による近世的な人間像を打ち立て、その思想は、フィヒテ(J. G. Fichte, 1762-1814)、シェリング(F. W. Schelling, 1775-1854)、ヘーゲル(G. F. W. Hegel, 1770-1831)らへと受け継がれていきます。19世紀の後半になると唯物論のマルクス(K. H. Marx, 1818-83)が登場。また、同時代のフランスでは実証哲学が盛んでしたし、イギリスでは、ベーコン以来の経験主義哲学に基づいて、ミル(J. S. Mill, 1806-73)やスペンサー(H. Spence, 1820-1903)などが活躍します。こうした文芸方面や思想界の動きは、ウィーン体制の崩壊に始まる国民主義的な傾向と結びついて、しだいに現実主義的傾向を生み、写実主義や自然主義的な傾向を経て、19世紀末のデカダンスへとつながっていくことになります。

自然科学の世界も、産業革命を契機として、急速に進歩していきます。エネルギー不滅の法則の発見に貢献したマイヤー(J. R. von Mayer,1814-78)やヘルムホルツ(H. Helmholtz, 1821-94)、電池の発明者ヴォルタ(A. Volta, 1745-1827)や電磁気についてのさまざまな発見で知られるファラデー(M. Faraday, 1791-1867)、進化論のダーウィン(C. Darwin, 1809-82)、遺伝学のメンデル(G. J. Mendel, 1822-84)、医学のパストゥール(L. Pasteur, 1822-96)、符号式電信の発明者モールス(S.F.B. Morse, 1791-1872)や電話の発明者ベル(A. G. Bell, 1847-1922)、さらに電球をはじめとする多くの発明で知られるエディソン(T. Edison, 1847-1931)などが、この時代に続々と登場します。これらの人名を列挙しただけでも、私たちの現在の生活に、19 世紀の人々がいかに重大な貢献をしたか、そして、これまでの世紀に比べて、文化や暮らしの進歩がいかにスピードアップしてきたかがわかるでしょう。

社会や政治の面からみれば、フランス革命により、ヨーロッパの絶対主義体制の一角が崩れた後、ナポレオンの出現と彼の敗退、その決着をつけるべく開かれたウィーン会議とそれによる反動体制、さらに民族国家の独立を目ざしての革命や国民運動といったように、社会体制を根本から揺り動かすような激動が続いた世紀でもありました。国によりそれぞれに事情は違っていたとはいえ、フランス革命によって打ち立てられた「人間は平等である」という思想は、人々の中に深く浸透していくことになりました。個人的な感情を大切にするロマン主義の思想も、つまりは、そこから生れてきたものといえます。

ロマン派は、産業革命やナポレオン戦争の後、ヨーロッパ全体で国民国家の形成や政治的な変革が進んでいた時代に発展しました。フランス革命(1789 年)やヨーロッパ各地での独立運動、そして産業化の影響で、人々の生活や価値観が大きく変わりました。

- **個人の感情表現の重視**:
  古典派の音楽が形式や調和を重視していたの に対して、ロマン派は個人の内面的な感情や想像力を音楽で表現することが重要視されました。これは文学や美術などの他の芸術分野でも同様で、感情豊かな表現や、幻想的な要素、自然への憧れが強調されました。

- **国民主義の台頭**:
  ヨーロッパ各地で国民国家が形成される過程で、民族的アイデンティティが強調されました。ロマン派の作曲家たちは、自国の民謡や民族音楽に基づいた作品を作ることが多く、これが音楽の中に国民主義的な要素を取り入れるきっかけとなりました。特にロシア、ハンガリー、チェコ、ノルウェーなどで、こうした動きが顕著でした。

2. 思想

ロマン派の作曲家たちは、感情の自由な表現と個人的な視点を重視しました。彼らの音楽は、文学や哲学、詩と深く結びついていました。ドイツの文学者ゲーテや哲学者シラーなどの影響を受け、詩的で幻想的な要素が盛り込まれました。

- **自然への憧れ**: 自然はロマン派の重要なテーマで、山、湖、森などの風景が音楽で描かれることがよくありました。作曲家は自然を通して自分自身や神秘的な世界を表現しました。シューベルトの「冬の旅」やメンデルスゾーンの「フィンガルの洞窟」などは、自然の情景を音楽で表現した作品です。
- **文学と音楽の融合**: ロマン派の音楽は、文学との結びつきが非常に強く、シューベルトの歌曲やシューマンのピアノ作品、ワーグナーのオペラなど、詩や物語に基づいた作品が多く作られました。